

「華人の文化」が解禁され、寺廟の祭も年々盛大になっている。

日常の場でデータを採る

津田浩司 つだ こうじ/AA研

人々の中で暮らし、ひたすら日常を共にする。何も目的がないように見えるが、人類学にとっては重要なフィールドワークの方法だ。そうして得られた経験や情報が、ある時何かを考える上で大事なデータとなることがあるからだ。



採るべき何か

私は2002年から、ジャワ島中部のルンバンという小さな港町でフィールドワークを続けている。インドネシアのある程度の規模の町には、「オラン・ティオンホア」と呼ばれる人たちが暮らしている。「オラン」は「人」、「ティオンホア」は「中華」の福建語読みだから、つまり「華人」だ。ルンバン一帯は、中国南岸から渡って来た華人が古くから定着したことで知られ、今も大通り沿いに400世帯ほどが集住している。私が調査しているのは、このジャワの田舎町で、人々が日々どのように「華人らしさ」を捉え、また感じているかということだ。ただ調査といっても、アンケートのように予め採るべきデータを明確に想定し、項目に沿って調べているわけではない。求めている何かは、人々の何気ない会話や行動をじっくりと観察し、また時にはこちらから働きかけることで、ふとした弾みに得られるような何かである。だから私のフィールドワークは何よりも、常に人々に関心を持ちつつ共に生活することそのものを重視している。

ジャワの華人

インドネシアの華人は、全人口の2~3%を占めると言われている。ただひと口に「華人」といっても、出身地や移住年代、世代、それに現居住地などによってアイデンティティは多様だ。特にジャワに暮らす華人の多くは、何世紀も前に祖先がこの地に移り住み、現地女性と混血を繰り返す中で世代を重ねてきた子孫たちだ。だから、衣食住の様式の大部分、時には外見すらも、現地の人と区別がつかぬほど混じり合っている。



中国語教室は少人数で気さくな雰囲気。最後列は唯一の男性受講者。

そんなジャワの華人たちの間でも、20世紀初頭には大陸で沸き起こった中華ナショナリズムと呼応し、より「純粋な華人」になろうとする動きが見られた。たとえば、それまで日々のコミュニケーションで彼らが用いていたのは、地元の人が話すジャワ語かマレー語（後のインドネシア語）、それに親族名称などにわずかばかり残る福建語起源の単語であった。だが、「自分たち本来の文化」を見出そうとする機運が高まる中、「ナショナルな言語」と見なされた中国語（北京語）による子弟教育が盛んに行われるようになったのだ。

1966年以降、こうした動きはインドネシア政府により厳しく抑え込まれるようになる。華人は現地社会に完全に溶け込むべきとする厳しい政策が採られたのだ。やがて彼らの多くは再び、言語、文化、そして名前の面でも、およそ「華人らしく」なくなってしまった。

中国語学習ブーム

1998年にこの国は大きな政治の変化を経験した。30年以上続いた独裁的体制が崩壊し、「改革」や「民主化」が叫ばれるようになったのだ。華人に対する抑圧的な扱いも見直され、かなり自由に「華人らしさ」を表明できるようになった。公共の場での漢字の使用も解禁され、寺廟の祭は賑やかさを増している。

このように全国的に華人を取り巻く環境が大きく変化する中で、人々の「華人らしさ」に対する意識の変化に関心を持って私は調査をしていたが、2006年のこと、そのルンバンの町でひとつの注目すべき現象が起こった。30代後半から50代の華人女性30名あまりが、こぞって中国語（北京語）を学び始めたのだ。

繰り返しになるが、ジャワの地で世代を重ねてきた彼女らは中国語を話せないし、日常必要とす



仲良し同士集まって、買い物やピクニックで遠出をすることもしばしば。



昼時、寺廟に集まり雑談にふける男性陣。

廈門に語学留学したことのある隣町出身の教師。
ルンバンにも親戚が多い。

る場もない。そんな彼女らが急に中国語を学び始めたということを、一体どう解釈すれば良いのだろうか。彼女らは華人だから当たり前なのだろうか。それとも、華人が失われた「華人らしさ=華人アイデンティティ」を復興させようとする動き、すなわち「再華人化」と呼ばれる現象が今まさに起きている、と結論づけられたいのだろうか。頭で考えるよりも、まずは地道に人々の日常の場からこの現象を見ることにした。

共に生活する中で見えてくるもの

この町には以前から、児童向けの英語や算盤そろばんの塾があった。2005年初頭にはそれらと並んで中国語の少人数教室も開設され、翌年からは隣町生まれの若い華人女性が新たな教師になった。そこに大挙して集まってきたのが上述の彼女らであった。

彼女らはさほど高くない月謝を払い、毎週2回ずつ少人数のグループに分かれ、基礎から勉強を始めていた。そんな彼女らに向かって直接的に、「あなた方はどうして中国語を学ぶのですか」と聞けば、「本来中国語は私たち華人の言語だから」という答えが返ってきた。そうした言葉を引き出して、「再華人化」の典型と結論づけることも可能だ。ただ、彼女らの日常の何気ない会話や日々の行動に目を向けると、そうとは言い切れない別の側面も見えてきたのだ。

たとえば気軽な雰囲気の中で、誰に誘われ教室に通い始めたかを尋ねると、「いつもの〇〇さんよ」と返事が返ってきた。お昼時、町内の寺廟に集まり雑談に興じる男性陣に交じって、「奥さんはずいぶん熱心に教室に通ってるね」と何とはなしに話しかけてみると、「家ではちっとも勉強せず、ただ時間潰しのためだけに集まって……」と予想外の愚痴も聞こえてきた。

1年後、再びルンバンの町を訪ねてみた。すると、中国語教室の参加者は、あのブームが嘘だったかのように激減していた。「華人らしさの追求」はどうなってしまったのだ？

その時ハタと思い出したことがある。そういえば彼女らは、以前からも気の合う仲間同士で様々な趣味の集まりを作ってきたのではなかったか。思い当たるだけでも、2002年半ばのサイクリング、2003年のダンス教室、その年の暮からはスイミング……。そう、娯楽に乏しいこの田舎町で時間とお金にゆとりのある彼女らは、いつも似たようなメンバーで同好会を立ち上げてきた。しか

も、どれも1年ほどで飽きてはまた別の集まりを作る、ということを繰り返してきたのだ。この中国語教室もそんな同好会を思い起こさせるパターンではないか。

そこで改めて、すでに教室を辞めた人をつかまえては、「今日はレッスンないの？」ととぼけて聞いてみる。すると、「いくらやっても喋れないし、子供の勉強を見る時間もない。それに△△さんも辞めちゃったから」との返事。どの人も、日常の雑事、それにいつもの仲間とのつき合いのことを口にする。調べていくうちに、そもそもこの教室に彼女らが集まったのも、隣町から来た教師の親戚周辺から広まったロコミによるらしいことが分かってきた。

こうして日々の会話や行動を通して見えてきたのは、どうも彼女らは、他の同好会に集まるのと同じ気軽さの延長で中国語学習に臨んでいたらしいということである。

日常の中から立ち現れるデータ

このことに気づくためには、歴史的背景の理解はもちろんだが、何よりも人々の日常を知らなければならぬ。その中には、日頃からつき合いを重ねて人となりや把握したり、日々の会話の様々なトピックを理解しておくことなども含まれよう。早朝のサイクリング、昼時の寺廟での雑談、夕時のダンス教室など、生活の様々な場を知り経験を共にしておくことも重要だ。と、このように言うと、何ら目的のない調査だと思われるかもしれない。実際私もよくフィールドの人から、「お前はフラフラしてばかりで、ちゃんと調査しているのか？」と心配されたものだ。だがそうして「フラフラ」しつつ見聞き経験したことが、たとえば中国語学習ブームの実態や、人々の「華人らしさ」に対する意識のあり方を考える際の大事な材料として、後々生きてくることがある。そうした人々の日常に沈潜している形もまとももない情報や経験が何らかの発見に結びついた瞬間、私は「データを採っていた」ことになるのだ。

ところで、華人の間での中国語学習ブームは、ルンバンでのみ見られる特殊な現象ではなく、実は近年インドネシア中で観察されており、例の若い教師のように中国への留学者も増え始めている。これが仮に大きな潮流ともなれば、ルンバンで見られたあのブームも——20世紀初頭の現象が普通そう語られるように——結局は「再華人化」の一端だったのだ、とひと括りにされてしまう日が来るかもしれない。だが、「華人らしさ」を調査することに専心して安易に結論を先取りするのではなく、まずは人々と共に暮らしつつ、今この瞬間生起していることを慎重かつ微細に見てゆく。そうする中で浮かび上がってきたのは、彼女らの「華人らしさ」ではなく、むしろ日常を生きる普通の「おばさま方」としての姿であった。